
都の西北金子の杜

ふじとうさくしゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

都の西北金子の杜

【Nコード】

N9543X

【作者名】

ふじとうさくしゅう

【あらすじ】

1970年台、東京で大学生活を送るため上京した或青年の日常生活を描く。この年代の若者の頭のなかには異性のことがその9割を占めていると言っても過言ではない。その強烈な誘惑に流されるのか、それともそれを克服できるのかで、ひとの人生が大きく変わることも多い。この青年は、人生のターニングポイントに立ち、恋と就職のための勉強をどのように両立させ、乗り越え或いは挫折していくのか。

日々の何気ない出来事を通じて、その凡庸な生きざまを牧歌的な夕

ツチで描く。

そして、この青年の30年後の姿は・・・。
タイムスリップ的な興奮の結末とは。

金子荘との出会い

<

1

不気味な程に沈黙した人波は、ダツダツと単調な足音だけを立て大河のように整然と流れていた。その流れに逆行したり横切ろうものなら、流れは小さな渦巻きのようになって乱れ、そして次々と迫る上流からの圧倒的な流れに押し流されてしまう。

朝8時過ぎ、僕は池袋駅の人混みに右往左往しながらも、やつとこのことで山手線のホームにまで辿り着いていた。新宿方面のみどり色の電車が恐ろしい程のスピードでホームに滑り込んでくる。怒涛のように人波が電車内に流れ込むなか、僕もそれに身を任せるようにして乗車している積もりだった。しかしそこには田舎者だけが墜ちる落とし穴があったようで、突然僕の体はスツと沈み込み、前のめりになって転んでしまった。電車とホームの間の隙間に片足が墜ちたのだ。

直ぐ後ろのサラリーマン風のおじさんが「危ない！」と言って立ち止まってくれた。そのおじさんに咄嗟の行動が出来なかったなら、今頃僕は人波の下敷になっていたに違いない。皆が電車に乗り終えると、今度は駅員がこぼれ出しそうな乗客をギューギューと圧してドアが閉まるまで電車の中に詰め込んでしまう。車内では禿げた小さなおじさんが人の合間に挟まれ、ウツウツと唸り声を上げている。このような通学が4年間続くと思うとうんざりするのだが、東京のサラリーマンは定年まで何十年もの間こんなことを強いられるわけで、僕も就職を果たしてどうしたものかと今から悩む次第だ。東京の大学に入学が決まり、中野に住む従兄を頼って上京したのは僕が18才のとき、田中内閣の日本列島改造論の行き詰まりが見え始めた昭和48年春のことだった。僕は西武池袋線の江古田駅から徒歩15分のところにアパートを構え、学校までに2度電車を乗

換える。

江古田は、駅周辺に武蔵大や日大芸術学部などの大学が点在し、華やかさと活気に溢れた学生の街だ。そして僕の従兄も5年程前から江古田駅の近くに住み、慣れた江古田銀座を肩で風切りながら颯爽と歩き、食堂や不動産屋などを次々と案内してくれるその姿は実に頼もしく見えたものだ。

上京するとすぐに、僕は従兄の案内で江古田駅前の3坪程のちよつとした空間に店を構える、その名も『江古田不動産』の60過ぎのくたびれた、村役場の囑託職員のようなおやじに幾つかのアパートを紹介してもらい、そのうち幾つかは実際に行つて見せてもらった。どれもこれもどنگりの背比べのようにも思えたが、東京辺りの住環境はこんなものだ無理矢理自らを納得させ、気に入らないながらも、その中では一番ましそうに思えるものを選んで取り敢えずは決めてしまった。

実を言うと、東京でひとり暮らしを始めるに当り、僕には頭に描いた憧れの生活というものがあつた。当時洋画は正にハリウッド映画全盛期で、マックイーンやポールニューマン、ロバートレッドフォード、それにフランスのアランドロンにジャンポールベルモンドなどの大スターが活躍し、僕はその派手なアクションやニヒルな格好よさに魅せられ、映画を月何本見たとか言つては友達同士で自慢し合つたりし、毎月洋画の情報誌を購読する程の熱心さだつた。そんな映画に出てきそうな、それ程新しくも綺麗でもなく、どちらかといえば都会独特の孤独さや暗さの漂う洋室で、できれば古ぼけた暖炉のようなものがあつたりする、そんなニヒルな部屋で外国映画のような生活を送りたかつたのだ。

しかし、やはり現実とは違うもの。そんな部屋がそんじよそこらにある筈もなく、そしてその現実とは言えば、殺風景な部屋が長屋のような建物の中に上下各5つぐらいずつ、養鶏所の鶏舎のように規則正しく並んだ何の変哲もないものだった。

そのアパートは中学時代からの友人の高井君や従兄のアパートから

も程近く、溜り場的要素は既に十分に備えていたのである。

アパートが決まると僕の母と従兄の母2人が東京見物がてら、僕の身の回りの品を買い揃えにわざわざ田舎から、ローカル線や新幹線を乗り継ぎ10時間以上もかけて上京して来た。

「まあ、東京というところは凄いとこやねえ」

従兄の母、つまり僕にとっては伯母に当る夏子さんが大きなどんぐり目をして呆れたように言う。

「なんで？」と僕。

すると夏子さんは、持っていたちり紙を人指し指に被せ、その指を自分の鼻の穴に突っ込んで2、3回グリグリとこねた。

「ほら見てこれを」

その指の形をしたちり紙には真っ黒い煤のようなものが経張り着いている。

「こりゃあスモッグよ。ほら、車の排気ガスやら工場から出るほら……、鼻が煙突みたいになっちゅう。怖いちゃ」

夏子さんは大袈裟に身震いまでした。冗談半分にするその仕草が彼女にはよく似合う。

彼女は田舎のオバサンではあるが、目鼻だちがくつきりしていて、特に目が二重で綺麗だった。心持頬骨の張ったその顔立ちは、無理をすればオードリー・ヘップバーンを想像出来なくもない。

以前に僕が映画雑誌のヘップバーンの写真を夏子さんに見せながらそのことを言うと、「こりゃ綺麗な人じゃあ！エラが張っちゃっても構わんもんじゃねえ。誰言うた？名前」

満面笑みで僕に聞く。

「オードリー・ヘップバーンという人。『ローマの休日』という映画に出てた女優で、男はグレゴリー・ペックという俳優と共演しちゃった。」

夏子さんは『ローマの休日』というタイトルには反応を示したが、俳優の名前となるとチンプンカンプンのようで

「なに？屁ー、ブーッ、バッーん？妙な名前じゃねえ」と言って顔

を歪めた。

その時からオードリーのことは、『屁ー、プーッ、バーン』と区切って呼び、グレゴリーペックのことは『グリグリペック』と呼んだ。『びつくりした言ったら、ねえ雅ちゃん』と言って母の注意を促した。

母は僕の洗濯物を畳んでは今日買ったばかりの小さな白い整理筆筭に仕舞い込んでいた。母は気が強いが物静かで、一方の夏子さんは臆病者だがひょうきんでよく喋る。彼女は僕の父の妹で、母とは年も余り変わらないし、子供の頃からの仲良しである。

「ねえ！今日その公園で、びつくりしたねえ。あのねえ、若い、そうじゃねえふたり共大学生じゃろうかねえ。男女のアベックがやってねえ、男の子が女の子を肩車して公園の中の道を歩いて行きゆがよ。まっことあれには恐れ入った。」

夏子さんは如何にも驚いたように大きな目を更に見開いた。

「そりゃあおかしいねえ」それまで、これも今日買ったばかりの僕のベットに座ってジツと話を聴いていた従兄が口を挟む。

「そりゃあちよつと、いやちよつとどころやない、かなりおかしい。なんぼ東京でも、そんなことする人は滅多におらんわ。僕らあも長いこと東京におるけんど見たことないで。」

「そうかね」と夏子さん。まだ半信半疑のようだ。ひょっとして東京なら何が起こつても不思議はないといった面持ちだ。

「そりゃあそうと、今からどうする？どっか遊びに行く？東京見物に」

結局我々は、4人で上野動物園にパンダを見に行くことになり、我々が出掛ける時ちょうど遊びに来た高井君も誘って、いや誘ってというより連れて行かざるを得ないその場の状況から伴っただけのことだった。

しかし高井君が、自前の電車代とか動物園の入園料を積極的に出さうとせず、我々に不信感を抱かせ、特に彼とは中学以来の友人である僕をがっかりさせた。

僕たちは帰路、パンダはきつとぬいぐるみの中に人が入ってるに違いない、可愛い過ぎて実に奇妙な生き物だ、などと言いながら山手線で池袋に向かっていた。

一生友達、いやもつと限定的に、一生親友なんてあるんだろうか。漠然とした不安感に襲われながら、電車の長椅子に座って一生懸命アランドロンに似せようとポーズを取っている高井君の横顔を眺めていた。

アパートのひとり住まいや大学での生活が少しは落ち着きかかったところ、たまたま僕のアパートに3人の高校時代の同級生が集まった。ひとりが高井君、もうひとりは今春医大生になったばかりの小笠原君。そしてあとひとりは受験に失敗し代々木ゼミで浪人生活を送っている岡君だ。

「津田君、僕今日ここで晩飯食べてつてもえいんやけど」

岡君独特の言い回しだ。岡君は目が大きく、目鼻立ちがはつきりしていてビートルズのポールマッカートニーを想起させる印象深い顔だ。

「僕もいいかも」

高井君が薄笑いを浮かべながら続いた。もう一人の小笠原君は細い直毛の前髪を垂らし、言葉を発する代わりにその鬱陶しそうな髪の毛の奥で切長の目が怪しく笑っている。

「米は家から送って来てあるけど、おかずを何か買ってきて作る？」
みんなでワイワイしながら自分の家で料理を作ったり一緒に食べたりののは、僕としても結構嬉しい企画なのだ。結局すき焼きを作ろうということになり、4人全員で近くのスーパーに材料の買い出しに行くという牧歌的だが、大学生としては少々呆れた風景となっていた。

僕の母が作るすき焼きはすこぶるシンプルで、肉と青ネギ、それに糸コンニャクぐらいしか入っていない。だから僕の中ではそんなすき焼きがいつの間にか定着していた。

どつという訳か今日の食材の決定権は岡君が持っていて、彼は牛肉か

ら始まって、シラタキ、春菊、焼き豆腐、椎茸、えのき、玉子と次々にスーパ―の籠に放り込んでいく。しかし青ネギがまだ籠に入つて来ない。僕の中では青ネギはすき焼きには不可欠のものなのに野菜売り場のどこを捜しても見当たらないのだ。

「何を捜しゆが？」横から小笠原君が聞いてきた。

「いや、青ネギがないねえ。普通すき焼きには青ネギ入れん？」

岡君のお陰で随分いろんな具が買われ豪華そうになったすき焼きだったが、一応僕なりの自己主張もしてみた。

「東京には青ネギは無いのんで、ほとんどこの白ネギしか売ってないがよ。そんなことも知らん？」

珍しく小笠原君の都会人ぶった発言だ。

僕は単に、ヘーと感心した振りをしてみせるが、一方の岡君は軽く受け流すのが余り得意じゃないようで、ほんのすこし歪んだ顔をしながら

「凄い！江戸っ子みたいや。」と皮肉るのを忘れていない。そして岡君は最後に「これも買うてえい？」と赤いウィンナーソーセージを一袋持つて僕に見せた。

「えー？そんなもんすき焼きに入れるが？」

と今度は高井君が横から口を挟む。

「これ入れたら美味しいで。構わん？」

そんなこんなで随分と具沢山で豪華なすき焼きになったが、割り勘だし、食い盛りの若者が4人も居るんだから残すことはないだろうと、袋を4つに分けて貰つて平等に抱えて持ち帰った。

僕の部屋の小さな台所で4人が手分けしてすき焼きの準備に取り掛かる。丁度僕が台所で問題の白ネギをどんなに切ったらいいのかわからずモタモタしてるとき、トントントントンと誰かが階段を上がって来る音がした。多分階段を隔てた隣の部屋の住人だろうと思つてみると、どうやら僕の部屋のドアが開かれ誰かが部屋に入ろうとしたようで、入口の正面に置いてあるベットのの上に座っていた岡君と目が合い、一瞬立ち止まっているようだ。台所に居る僕からは入口

は見えず、岡君の表情が分かるのみである。岡君は僕の方を見ながら「誰か来たよ」と僕に言う。僕が台所から顔だけ覗かせ入口の方を見てみると、そこには全く見覚えのない、20代後半位と思ぼしき男が立っていた。男は僕と目を合わすと少し戸惑った様子で、

「あれ、間違えたか」と言いながら引き返そうとし、突然のことで面食らっていた僕も事情が分かってホッとしたのか、或は愛想笑いの積もりだったのか、咄嗟に「フフツツ」と笑った。

するとその男は、再び僕の方に向き直り、

「笑ってるのか？おまえ！えっ？」と凄んで見せた。

「いや、別に？」と僕。

「別につてこたあねえだろう。笑ったじゃねえか。」

男は少々酔ってるのか、或はヤクザ系の与太者なのか、どちらにしても、もめ事と面倒なことの嫌いな僕は、謝るのは筋から言って向こうの方だと思いつつも取り敢えず謝っておくことにして「すいません」と軽く頭を下げるだけの最少限のお詫びをしておいた。

すると男は彼なりに一応納得したのか、僕の顔に精一杯の眼を飛ばしながら部屋の戸をボタンと閉めた。

「なんやろうねえ。あれ」不安そうに言う僕に

「ヤクザや。また来るで、あいつ」

岡君の悪戯っぽい顔が更に僕をいたぶる。すき焼きを食べる間、僕の転居計画の話題で話に花が咲きほこった。

その出来事以来、あの怖いお兄さんが近所に住んでいて、しかも僕は目を着けられている、ひょっとして彼は暴力団関係者なんだろうか、また何だかんだといちやもん着けて来るのでは、などと考えて、従兄やその時に居合せた友達に相談したが、「多分大丈夫じゃないあー」とかあるいは「また来るかも知れんね」と所詮は人ごとで、気休めにもならない無責任な発言ばかりだ。

こんな状態ではとてもじゃないが、充実した学生生活など送れやしないと、僕は入居して2ヶ月にも満たないアパートの転居を真剣に考えた。

そして最終的に金主である親に相談を持ち掛けたところ、さすがに親ともなると見知らぬ土地での我が子のひとり暮らしには心配も大きいようで、即座に引越しを承諾してくれた。そこで早速に僕は従兄を伴って再び江古田不動産を訪れることとなった。

砂丘の風紋の様な皺を顔全体に刻んだ江古田不動産の社長にそれまでの経緯を話すと、

「いやあ、そうでしたか。そりゃあお気の毒でした。それがですね、丁度この江古田のお隣の東長崎にいい物件が空きましてねえ。いえ東長崎と言っても、江古田と東長崎の中間位。心持ち長崎寄りってとこなんですけどね。いやあそこならいいわ」

「はあ、そうですか」

「アパートは築25年とちょっと古めなんですけどね、大家さんの奥さんがまだ若い人でしてね、割合小綺麗にしてるんですよ。風呂屋も近いし。一度見てみますか」

僕が江古田不動産の社長の案内で金子荘を訪ねたのは、皐月五月の新緑も薫る頃だった。築25年と言うだけあって外観も中も少し古ぼけた感じで、割合小綺麗という表現も余り的確ではないような気がした。多分大家さんの奥さんが社長の年からすれば若くて割合小綺麗なのか、或は彼にとって少し魅力的なんだろうと想像した。ただアパートの回りに桜の大き木をはじめ大小数々の木々が点在し、ちよっとした木立ちの中にある落ち着きある佇まいが印象的な建物だった。

気になる奥さんは留守だったようで、従兄と僕は社長に連れられ、大家さんの住む家の2階に南北4部屋が並ぶうちの一室南端の部屋に案内された。

6畳一間に小さな台所の付いたその部屋は、板の間の完全な洋室で、天井も押し入れのベニヤ板の開き戸も元々は純白の筈がかなり黒ずんでいて、全体の古ぼけた感じを一層助長させていた。そして部屋の中央に机が一つ置いてあり、60歳前後と思しき頭が少し禿げ上

がり如何にも知的な香りのする中年男性が、その机に向かって何か熱心に勉強に勤しむ姿があった。

それが大家さんその人だったのだ。

南側と東側にある中敷居の窓から流れ込む薫風が部屋の隅々にまで充滿していて、古ぼけた部屋であるにもかかわらずその清々しい景色は、そこに初めて足を踏み入れた僕の心を圧倒した。そして考える余地もなくその部屋への引越しを決めた僕は、それから間もなく金子荘の住人となったのである。僕の嗜好を知っている従兄や友人達は、僕と金子荘との出会いを祝福しつつもその一方で、ほんの少し妬みさえもした。

大家の奥さんは、40過ぎぐらいで痩せぎすの彫りの深い顔立ちで、やはり年の割には若々しくて気品のあるひとだった。江古田不動産の社長の言う表現が少なからず解るような気がした。

この前見かけた主人は、某国立大学の外国語講師だということ、奥さんとは20歳程の年の差がある。それに二人の間には子供が居ないためか夫婦というより親子か友達同士といった雰囲気があり、特に奥さんの方は自由闊達な印象が強く、僕にしてみれば理想的な大家さん像とも言えた。

アパートの外観の古さなどは取り立てて言う程のものでもなかったが、押し入れの扉と天井の薄汚れた白だけは出来れば何とかしたいと思い、悩み抜いた末に契約違反とは知りつつも、事前に大家さんに断る勇気も無く、いつそ黙って勝手にペンキを塗り直すことにした。市販の白いペンキとスポンジローラーのようなものを買って来て、部屋中に新聞紙を敷き詰め、机の上によじ登って馬鹿みたいに大口を開けながら、天井一面にスポンジローラーを這わせた。

心配だった出来映えはと言えば、これが無器用な僕にしては上々の部類で、部屋全体が明るく綺麗に蘇り、元々の色と同じ色で塗ったこともあって、無断で塗ったことがなんとか大家さんには気付かれずに済むような気がした。

家賃は現金を直接大家さんのところに持参する形で払うことになっ

ていたため、月に一度月末には必ずお互いに顔を合わすことになる訳で、その時が唯一のコミュニケーションの場でもあった。

大家さんのご主人は健さん、奥さんは慶子さんという名前だそうで、「ごめんなさい。津田さんの部屋の下の一階にね、私のピアノが置いてあるのね。だからたまにそれ弾いたりするのよ。ちよっとうるさいことあるかもしれないけど、許してね」と慶子さんは家賃の領収を奥の方で書きながらいう。

「ああ、そうですか。いやいいですよ。少しくらい」

僕は玄関の靴脱ぎ場のようなところに立つたまま答える。

「あらそう？すみませんねえ。でも弾くのはほとんど昼間だと思うのよ。津田さん、学校行ってるでしょうから居ないことの方が多いかしらねえ」

慶子さんは本当に痩せていて、中年女性につきものの贅肉の欠片も見当たらない。

「ここは風呂屋が近いからいいですね。それに緑もいっぱいあるし」
「でしょう。ありがたいわよねえ。私なんかもたまには大きな湯舟に浸かりたいときなんか、お風呂屋さんに行ったりもするのよ。貴方のお部屋のすぐ前にある桜の木ねえ、あれ春になると花がいっぱい咲いてねえ、窓開けてると花びらが舞い込んで来るぐらいになるのよ。お友達なんかここのことを『金子の杜』なんて言うの。大きな木が多いから」

金子荘での生活は概して快適で、これといった不満はなかった。慶子さんのピアノも昼間1、2度聞かせ貰ったが、決して上手といえた代物ではなく、詰り詰りしながら2、30分も弾けば、飽きるのかそれとも諦めるのか、直ぐに止めてしまい迷惑なところまでには到らない。

しかし騒音と言えば一つだけ特筆に値するものがあつた。金子荘の前の道は緩やかな坂道になっていて、その坂を30メートル程下り切ったところに大きな小学校があり、朝の通学時間、つまり8時10分頃になると大勢の小学生達がその坂を一斉に下って行く。その

靴音と話声を初めて体験したときは何事かと思わず身構えた程だったが、ほんの20分程度のことでもあり、慣れてしまえばそのうち気にもならなくなった。慣れとは恐ろしく便利なものだ。
人の一生は慣れの積み重ねなんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9543x/>

都の西北金子の杜

2011年10月26日22時04分発行